

【論文】

クリスタ・ヴォルフのエッセイ 『ベッティーネ論』について

松 永 知 子

Zum Essay *Ein Brief über die Bettine* von Christa Wolf

MATSUNAGA, Tomoko

要旨：ベッティーネは後期ロマン派の中心人物クレメンス・ブレンターノの妹であり、アヒム・フォン・アルニムの妻である。文学史では50歳になってから書いた『ゲーテとある子供との往復書簡』の著者として知られている。ベッティーネ像といえば、一般的には彼女の若い頃のイメージ、例えば妖精のようなどか、自己抑制を知らない少々無作法な子供、両性具有、夢想家というイメージで捉えられている。或いは、クレメンスとアルニムを硬く結び付けている存在という見方もなされ得る。しかし、アルニムとの結婚の間は、妻として7人の子供の母としての裏方の役目を立派に果たした。若い頃の彼女からは信じられないことだった。その後、夫の死後に彼女の第三の人生が始まる。この場こそが彼女の本領が遺憾なく発揮された表舞台となった。さて、2作目に彼女の青春の友との交友を扱った『ギュンデローデ』を書くが、この著書は単なる青春の回想記ではない。50代の彼女の新しい体験と重なり合って結びついていて、それ故に独特の趣のある作品になっていると、クリスタ・ヴォルフは作家の鋭い目で洞察している。ここでは、その検証を試みる。

キーワード：ベッティーネ、クリスタ・ヴォルフ、ギュンデローデ、19世紀前半のドイツ、女性文学

はじめに

東ドイツを代表する女性作家クリスタ・ヴォルフ (Christa Wolf 1929~) は、ロマン派の女性作家カロリーネ・フォン・ギュンデローデ (Karoline von Günderode 1780~1806) とベッティーナ・フォン・アルニム (Bettina von Arnim 1785~1859) の二人に関するエッセイを1970年代後半相次いで書いている。ギュンデローデについてのエッセイ、*Der Schatten eines Traumes. Karoline von Günderode – ein Entwurf* (夢の影。カロリーネ・フォン・ギュンデローデ –一つの構想) は1978年10月に書かれた。そしてこのエッセイは、1979年にクリスタ・ヴォルフが編集したカロリーネ・フォン・ギュンデローデの作品と手紙と同時代人の証言から成る本 *Karoline von Günderode Der Schatten eines Traumes* (『カロリーネ・フォン・ギュンデローデ 夢の影』)¹⁾ の序文に掲載された。ベッティーネについてのエッセイ、*Nun ja! Das nächste Leben geht aber heute an. Ein Brief über die Bettine* (そうだわ! 次の人生は今日始まるのだわ! ベッティーネについての手紙) は1979年12月に書かれた後、1981年に復刻されたベッティーナ・フォン・アルニムの書簡小説 *Die Günderode* (『ギュンデローデ』)²⁾ のあとがきに付けられた。その後、両エッセイとも1986年にクリスタ・ヴォルフ評論集 *Die Dimension des Autors* (『作家の立場』) の2巻目³⁾ に収録されている。以下の私の拙論では、クリスタ・ヴォルフのこのベッティーネ論を検証することを試みる。

なお、ベッティーネの名前については、彼女の正式名はエリザベート (Elisabeth von Arnim) で、愛称としてベッティーネともベッティーナとも言われていて、両方使われている。文学史や文学事典ではベッティーナで通っているが、家族の中ではベッティーネと呼ばれていたし、彼女自身も手紙の中ではベッティーネと書いている。クリスタ・ヴォルフのこのエッセイでも、ベッティーネを使っているので原文に従って両方を使い分けることにする。ギュンデローデの名前については、クリスタ・ヴォルフはギュンダーローデと言っているが、本論ではギュンデローデに統一した。

1 青春期のベッティーナ

ベッティーナ・ブレンターノ (Elisabeth Brentano 1785~1859) の父は、フランクフルト・アム・マインの豪商で、イタリア生まれのピエトロ・アントニオ・ブレンターノ (Pietro Antonio Brentano 1735~1797)、母はマキシミリアーネ・ラロッシュ (Maximiliane La Roche 1756~1793)、ピエトロの2番目の妻で、著名な作家ゾフィー・フォン・ラロッシュ (Sophie von La Roche 1730~1807) の娘である。ベッティーナは二人の間の七人目の子供として生まれ、兄にはロマン派の作家クレメンス・ブレンターノ (Clemens Brentano 1778~1842) がいる。ベッティーナが8歳のとき母マキシミリアーネが亡くなり、彼女は二人の妹ルル (Lulu 1787~1854) とメリーネ (Meline 1788~1861) とともにフリッツラー (Fritzlar) のウルスラ会修道院 (Ursulinenkloster) に預けられ、4年間そこで教育を受けた。4年後に父も亡くなり、彼女たちはオッフエンバッハ (Offenbach) に住む祖母ラロッシュのもとに引き取られた。ベッティーナはそこでカロリーネ・フォン・ギュンデローデ (Karoline von Günderode 1780~1806) と知り合った。5歳年上のギュンデローデは、ベッティーナの青春期の忘れえぬ友であり、師でもある。ベッティーナは50代になってから書いた書簡小説『ギュンデローデ』において、彼女との青春を描き、彼女の足跡を留めた。

ギュンデローデは、1780年カールスルーエ (Karlsruhe) に生まれた。父ヘクトル・ヴィルヘルム・フォン・ギュンデローデ (Hector Wilhelm von Günderode 1775~1786) はカールスルーエの宮廷顧問官、後に侍従も勤めたが、また歴史関係で数冊の著書もある。しかし、父はカロリーネが6歳のときに亡くなり、その後一家はハーナウ (Hanau) に移り住んだ。カロリーネは1797年17歳のとき、フランクフルト・アム・マインにあるクロンシュテット新教貴族女性修道会寮 (Das v. Cronstetten u. v. Hynspergische adlige evgl. Damenstift) の寮生となった。この施設は修道会

という名前だが、いわゆる修道院ではなく、新教徒の財産のない貴族の未婚女性を保護するための施設であり、彼女は経済的理由から入ったのである。寮の生活というのは当然のことながら種々の制約があり、寮生は楽しみを求めるような場所、例えば劇場や舞踏会に足を踏み入れてはならないとか、泊りがけで出かけるときには許可がいるといったように細かな規則があった。彼女は26年の短い生涯を自らの手で命を絶つまでそこで暮らした。寮の個室ではしかしながら、彼女は思うがままに本を読み詩作することに耽り、詩人になることを切望した。貧困と身分と性という3重の束縛にがんじがらめにされていた彼女にとって、彼女の意のままになる精神活動は唯一の逃げ道だったといえる。彼女が書いたのは主に抒情詩だったが、演劇の試作や散文の断片も書き残している。そのうち生前に出版されたのはわずかで、ティアーン (Tian) というペンネームで1804年第一詩集 *Gedichte und Phantasien* (詩と想像)、1805年 *Poetische Fragmente* (詩的断章)、1806年 *Melete* (メレーテ) の3作が出版されたが、殆ど注目されなかった。ところが彼女の死後30数年を経たとき、ベッティーナが書簡小説『ギュンデローデ』を書いたことにより、その名がかすかながらも人々の記憶に留められた。その後、彼女の作品は1920年代になって評価され全集も出版されたが、再び忘れ去られた。それから50年後の1970年代になって、今度はクリスタ・ヴォルフによって本格的に再評価されるという経過をたどったのである。こうしてギュンデローデの人と作品が文学史の中に徐々にとり入れられ始めたが、そもそも最初にギュンデローデを評価したのはベッティーナだった。なお、クリスタ・ヴォルフのエッセイ『夢の影』は翻訳¹⁾があるので、是非参照されたい。

ベッティーナとギュンデローデが初めて出会ったのは、1802年頃でベッティーナが16歳、ギュンデローデが21歳の頃であったと思われる。その当時ギュンデローデは、ベッティーナの兄クレメンスや彼の友ザヴィニイ (Friedrich Carl von Savigny 1779~1861) や、ベッティーナの5歳年上の姉、グンダと愛称で呼ばれていたクニグンデ (Kunigunde 1780~1863) た

ちと交際していた。彼女は彼らと手紙を活発に交換し合い、連絡を取り合っていて、彼らとフランス革命後の新しい時代の価値観を共有していた。そして、彼女はザヴィニイを密かに愛していた。しかし、自分は彼にふさわしくないのではないかと自分の気持を抑えていたが、切ない恋心の痛みに耐え兼ね、そうした自分を持って余してもいた。彼女の中には男性を通してではなく、詩人として自分の人生を生きたいと考える自分と、もう一方では、一人の男性の妻であり家庭を築きその世話をしたいと思う自分がいて、統一することの不可能な二つの願望のジレンマに陥っていた。1800年代初頭、女性でありかつ詩人であることはほとんど考えられない時代であったことを思うと、彼女の抱いた願望は非常に果敢なことだった。しかし、彼女以外にもこの時代何かを求める女性たちが現れ始めていた。例えば、カロリーネ・シュレーゲル＝シェリング（Caroline Schlegel-Schelling 1763~1809）、ゾフィー・メロー＝ブレンターノ（Sophie Mereau-Brentano 1770~1806）、ラーエル・ファルンハーゲン（Rahel Varnhagen 1771~1833）、それにベッティーナ・ブレンターノといったロマン派の女性たちがそうである。彼女たちは独立し自由でありたいと願う女性の最初の世代だった。

ザヴィニイという人物は、法学者で抜群の頭脳の持ち主、リアリストで好感の持てるしっかりした男だった。マールブルクとランツフト大学で教えた後、1810年にはベルリン大学教授となり、1842年から48年にはプロイセン司法大臣にまで上り詰めた。彼は結婚相手に結局グンダを選び、二人は1804年5月に結婚する。傷心のギュンデローデは、同年8月ハイデルベルクで古代学者フリードリヒ・クロイツァー（Friedrich Creuzer 1771~1858）と出会い、クロイツァーとの恋愛関係が始まる。クロイツァーはギュンデローデより9歳年上で、彼には13歳年上の妻がいた。彼はザヴィニイの友人でもあった。悲惨な結末に終わった恋だった。ギュンデローデは、1806年7月26日ライン河畔のヴィンケル（Winkel）で自殺した。

さて、ベッティーナの生い立ちに話を戻そう。ブレンターノ家では、父の死後ベッティーナの異母兄弟で長兄のフランツ（Franz 1765~1844）が、

ベッティーナの実兄ゲオルク（Georg 1775~1851）と共同でブレンターノ商会を引き継いだ。フランツは家長として、また弟妹の後見人としてその権威は兄弟たちにも承認されていた。フランツはベッティーナを厳しく躾けようとしたが、彼女はなかなか従おうとしなかった。そのことをフランツの妻アントニア（Antonia 1780~1869）はクレメンスに訴えている。「ベッティーネが熱心に英語や絵や音楽のレッスンを受けるように気にかけてください。彼女はレッスン中、よくばかげた悪ふざけをしますのです。」と。⁴⁾ ベッティーナは、お転婆で、きかん気で、生意気で、奔放な子供だったようだ。それでもフランツは、「ベッティーネはよくなり得る。もし人並みになり、自然になり、そして女性の幸せが見つけ出せないような風変わりな国を発見しようとしなければ。だが、そうなり次第すぐにトニー（アントニア）が彼女を自分に引き寄せ、家政や女性の仕事をするように自分の時間を割いてくれる。これがベッティーネにとって唯一の慰めである」（1802. 2. 10）とクレメンスに書いている。⁵⁾ クレメンスは、ベッティーナがフランクフルトの家族に囚われ、彼女の個性が徐々に押しつぶされそうになっていくのを見ることに心が痛んだ。このような煩わしいことの多い大家族の中において必死に抵抗しているベッティーナにとっては、ギュンデローデとの交友は精神的に大きな支えであったと思われる。

ギュンデローデとの交友は、最初はギュンデローデがオッフエンバッハのラロシュ家を訪れたことから始まったようであるが、すぐにベッティーナが、毎日のように修道会寮のギュンデローデを訪れるようになった。ギュンデローデの小さな部屋は寮の一階にあり、庭に面していた。その窓の前には一本の白楊（Silberpappel）の木があって、お転婆なベッティーナはよくその木の枝によじ登って、そこで朗読をしたと書いている。⁶⁾

二人の間で交わされた1804年夏の手紙では、ベッティーナの勉強のことがよく話題にされた。ベッティーネは彼女の歴史の先生について批判している。「ギリシアの歴史が特別に大事だということは、全然考えられないことです。私たちの先生は、宗教精神で頭の中がいっぱいです。聖書の

研究以外の他の徹底的な研究と解釈を認めません。私はもともと好意を抱いているユダヤ民族に関して、できる限りの知識を得たいのです。」⁷⁾ 歴史の勉強の単調さを嘆いているこの手紙への返信で、ギュンデローデは歴史の研究は大切だと答えている。「過去の光が暗い現在を照らしているのです。あなたの思想の怠惰な植物的生命を回復するためには、歴史が基本的であると私には思えます。歴史の中にこそ、すべての教養の強い力があるのです。— 過去は前へ駆り立てており、私たちの中の発展のあらゆる芽が過去の手によって種をまかれています。」⁸⁾ 「私の言うことを少し聞いて、私を信頼してください。歴史の基盤があなたの想像力とあなたの概念に適しているし、必要なのです。もしあなたの足もとに地盤がないなら、あなたは体をどこで支えようと思うのですか。」⁹⁾

1805年秋の手紙では、ベッティーナがギュンデローデの弟子になると一方的に宣言したことに対して、ギュンデローデは、「それはうれしいことです。しかし、先生というものは生徒から刺激を受けるというのも真実です。だから私があなたの生徒とも言えるでしょう」と答えている。¹⁰⁾ 二人の信頼関係は強くなっていった。ベッティーナは、友の思想をむさぼるように吸収しようとした。二人は一緒に本を読み合い、互いに不足を補い合った。二人はよく架空の旅行計画を立てて遊んだ。二人の旅する道や冒険をあれこれ想像することに熱中して、それらすべてを書き留め、すべてを紙に描いた。二人の想像力は、現実にはこれ以上の体験はできないと思うほどにたくましかった。それから、ギュンデローデはベッティーナには哲学が必要であると考え、哲学を教えようとした。彼女が講義した後で、彼女が話したことをレポートに書いて見せるように求めた。しかし、ベッティーナのレポートは的外れではないが緻密でなく、大部分は彼女の想像の産物に過ぎないことにギュンデローデは呆れた。ベッティーナは、自分の経験的な考え方に固執し、哲学の規範は不自然だと受け入れず、遂に衰弱し倒れてしまった。それを知ったとき、ギュンデローデはオッフエンバッハで静養しているベッティーナを訪れやさしく看護したが、結局、哲学

はベッティーナに向かないとわかり中止された。¹¹⁾

ベッティーナにとってギュンドローデとの交友は、彼女の青春期のみならず生涯において最も重要なものの一つだった。ギュンドローデにとっても、自分よりはるかに活力溢れるベッティーナを評価し、そして自由を愛し、ラディカルな考え方をするベッティーナを愛した。或るとき、ギュンドローデは彼女に心を許した余りに、短刀を見せて自殺について語ったことがあった。そのときのベッティーナの反応は激しく、「あなたが死んだら私はどうしたらいいの。--- あなたは私たちの友情をそんな風に軽く扱っているのね」¹²⁾と激怒した。そして、彼女はいつでもギュンドローデと世界中を歩く準備ができていたから、彼女を信頼して欲しいと訴えた。ベッティーナのこの一途な思いに、ギュンドローデは自分を恥じたが、大はしゃぎする、この激しい気性の若い娘には距離を置いて、自分のすべてを見せていなかった。彼女はザヴィニイへの愛やクロイツァーへの情熱等一切を話していなかった。

ベッティーナはギュンドローデの印象について、後年、次のように書いている。「彼女は、顔立ちが穏やかで、やわらかく、金髪的女性のようだった。褐色の髪だが、目は青く、長いまつげで覆われていた。彼女の笑い声は大きくなく、やわらかで少し抑えた甘ったるい笑い声で、その声の中には意欲と快活さがはっきり聞き取れた。－私が言おうとしていることを理解してもらえらるなら、彼女は歩いていたのでなく、逍遙していた。－彼女は背丈があり、その姿はすらりとしているという言葉では言い表せないほど麗しかった。彼女は遠慮がちな友情を示し、そして社交界で人目に付こうとする意志をあまりにも示すことがなさ過ぎた。」¹³⁾と。ギュンドローデの柔らかい物腰が目には浮ぶような友の言葉である。ギュンドローデは自意識は強くなかったが、誇り高い女性だった。

1805年から06年にかけての冬は、ベッティーナはマールブルクのザヴィニイ家で過ごしていた。そのとき、クロイツァーがザヴィニイ家を訪れ、ギュンドローデとの関係について、ザヴィニイに相談をしに来たことがあ

った。ベッティーナはそのとき二人の関係を初めて知り、クロイツァーに對して無作法な態度をとった。彼のような醜い男が彼女を愛する権利はないと、激しい嫉妬に駆られたためにである。その事があってからは、ギュンデローデはベッティーナと会うことを拒み、手紙も受け取らなくなった。クロイツァーが、ベッティーナやブレンターノ家の人たちと関係を絶つように、ギュンデローデに強く要求したのである。ベッティーナは何度も修道会寮を訪れたが、会ってもらえなかった。無二の親友からの突然の拒絶にあって、ベッティーナはそれまで経験したことのない深い絶望感を味わった。彼女は毎晩泣き明かした。

同年、彼女はオッフエンバッハの祖母の家で、祖母ゾフィー・フォン・ラロッシュとゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe 1749~1832）との間で交わされた手紙を偶然に発見した。その中には、ラロッシュの娘であり、ベッティーナの母であるマキシミリアーネへの愛に満ちた手紙があり、ゲーテの詩も含まれていた。マキシミリアーネは、若いゲーテを魅了した女性の一人だったが、マキシミリアーネの死後、ゲーテの家とブレンターノ家は付き合いが途絶えていた。母とゲーテとの関係を知ったベッティーナは、直ちに行動を起こした。妹のメリーネを連れて、1806年7月8日フランクフルトのゲーテの母を初めて訪れている。そして、ギュンデローデには手紙を書いた。「私はあなたの代わりに顧問官ゲーテ夫人を友に選びました。それはもちろん（あなたとの関係とは）まったく違ったものですが、その背景には私を幸福にしてくれるものがあります。」¹⁴⁾と。ギュンデローデはこの年の7月26日に自殺したので、無論ギュンデローデが見ることのなかった手紙だ。

ベッティーナはゲーテの母との交際で、ギュンデローデから受けた愛の拒絶による心の大きな傷を埋め合わせようとしていた。ゲーテの母は彼女を優しく受け入れた。この青春の傷痕は彼女の後半生にまで尾を引き、55歳にして彼女に『ギュンデローデ』を書かせることになるのである。また一方、ゲーテの母との交際からは後年、『ゲーテとある子供との往復書簡』

(*Goethe's Briefwechsel mit einem Kinde* 1835) が生まれ、この作品はベッティナーを作家として世に送り出すことになった。

ベッティナーは毎日のようにゲーテの母のもとを訪れた。ゲーテの母が、息子ゲーテの子供の頃の話をしてくれるのを聞いて、ベッティナーは幸福だった。そしてアヒム・フォン・アルニム (Achim von Arnim; 本名 Ludwig Joachim von Arnim 1781~1831) に報告している。顧問官ゲーテの母から語られた逸話から、この神のような人 (ゲーテのこと) の知られざる伝記を書くつもりだと。ベッティナーはこのときすでに、ゲーテに関する著書を書く目的を抱いていたことがわかる。¹⁵⁾ こうして、ベッティナーのゲーテに対する愛は、神聖に保存されていた母の遺産分を引き継ぐことになり、そして「彼女の人生の新しい時代」への幕を開いていった。

ベッティナーのゲーテ崇拜は熱烈で、1807年妹のルル夫妻とワイマール (Weimar) にゲーテを初めて訪問している。このときはゲーテから友好的に迎えられたようである。2回目は1810年、ザヴィニイ家とともにボヘミアの湯治場テプリッツ (Teplitz) へ行った時、その地に滞在していたゲーテと会っている。ゲーテと公園を散歩の間中、彼女はギュンデローデのことやその死について饒舌に語ったと、ゲーテの日記にも書かれている。¹⁶⁾ このとき、ベッティナーは近々にアルニムと結婚することもゲーテに告げている。3回目は1811年新婚の夫アルニムとともにワイマールに約1ヶ月間滞在している。そのとき、ベッティナーはゲーテの妻クリスティーアーネと些細なことで激しい口論となる事件を引き起こした。それ以後、ゲーテはベッティナーと会うことを拒否した。口論のそもその原因というのは、ベッティナーが頻繁にゲーテを訪問したことに対して、ゲーテの妻の恨みを買ったからだと夫のアルニムは書いている。さらに続けて、ゲーテが自分の妻をコントロールできないのは残念だ。ゲーテに対する作家としての尊敬の念は変わらないが、もうこれ以上近づきになりたいとは思わないとまで書いて、妻の肩を持っている。¹⁷⁾ アルニムも『少年の魔法の角笛』 (*Des Knaben Wunderhorn*) 第1巻¹⁸⁾ でゲーテに献辞を捧げたほど

ゲーテを崇拜していたのであった。そもそも、ロマン派の人たちにとっても、ゲーテは神のような存在だったのである。ところで、ゲーテの妻はワイマールの社交界では評判がよくなかったことを、ベッティーネのために付け加えておこう。ゲーテとの関係が断絶したその当座は、ベッティーネもゲーテのことはもう聞きたくないと言っていたが、ゲーテへの崇拜の念は変わらず、その後も何度か手紙を出している。しかし無視され続けた。

ベッティーネは1811年26歳でアルニムと結婚した。当時の娘としては遅い結婚だった。アルニムは、プロイセンの古い貴族の出である。彼は1801年ゲッティンゲン大学でクレメンス・ブレンターノと知り合い、友人になった。翌年二人はラインの船旅をしたが、そのときアルニムは、歴史と自然が一体になったラインの風景に深く感動する。この体験から民衆の文学の発掘と祖国に対する愛情を呼び起こそうと意図して、二人はドイツの古い宗教歌や職工歌や民謡などを集めた。当時、ドイツはナポレオンに支配されて屈辱の中にあつたのである。二人は収集したこれらの古い民謡を1805年から08年にかけてハイデルベルクで生活を共にして、編纂し出版した。それが、『少年の魔法の角笛』である。1805年に第1巻が、1808年に第2巻と第3巻¹⁹⁾が出版され3巻から成り立っている。この編纂にはベッティーネも協力したと思われる。さて、ベッティーネとアルニムとの馴れ初めであるが、二人が知り合ったのはかなり早い時期だった。クレメンスは1802年にすでに妹をアルニムに紹介しており、二人の仲介役を自発的に買って出てもいた。しかし、二人の関係はなかなか進展しなかった。1806年頃になってようやく二人の間で手紙が定期的に交わされるようになった。ギュンデローデ亡き後のことである。

結婚後、ベッティーネは夫アルニムの領地、ヴィーパースドルフ(Wiepersdorf)とベルリンの家を行き来する生活を送り、7人の子供を生き育て、妻として母としての役目を立派に果たした。しかし、沈黙と忍耐の20年間だった。夫アルニムは1831年、彼女が46歳のとき亡くなった。夫の早世による悲しみは深かったが、彼女はやがてそれを克服して新しい

人生への歩みを始めるのだった。彼女は再び、子供時代から青春初期の、あの決然とした挑戦的な、素朴な態度を取り始めてゆく。ベルリンの彼女の自宅は社交の場となり、彼女のサロンには著名人も無名の人も集った。彼女は慈善事業でも活躍した。著書も生涯で6冊出版した。青春の友ギュンデローデは、女であることと芸術家であることとの両立しがたい願望を持ち続け、自分のすべてをかけた男に見捨てられ自殺した。一方、ベッティーナは現実と折り合いをつけることができ、現実を生き抜いた後で書いた。生き方は正に対照的だった。

2 ベルリンのベッティーナ

ベッティーナは、1835年『ゲーテとある子供との往復書簡』(*Goethe's Briefwechsel mit einem Kinde*)、1840年『ギュンデローデ』(*Die Gündelode*)と一見すると、自分の青春を回顧するだけのように見える本を出版し、それに続いて1843年『国王に捧げる書』(*Dies Buch gehört dem König*)で、突如社会主義に接近するような本を著した。彼女の中でどのような変化が起きていたのだろうか。この疑問に対してクリスタ・ヴォルフは、一つの仮説を立て、50代のベッティーナの作品に貫いている創作の原動力を探索し論証した。

さて、ベッティーナが再び活動し始めた1830年代のヨーロッパの状況はどのようであっただろうか。1830年7月に起きたフランス七月革命の影響を受けて、ヨーロッパの自由主義運動は強く刺激され、ドイツにもその影響は波及し、ドイツも激動の時代を迎えていた。中部・北部のドイツの中小邦国、ブラウンシュヴァイク、ザクセン、クールヘッセン、ハノーファーでは暴動が起こり、旧君主を退位させ、より開明的な君主を迎え入れた。そして、これらの邦国は1831年から33年にかけて新しい憲法を獲得して、立憲君主制の体制が成立した。一方、南ドイツでは1832年バイエルン領プファルツの古城ハンバハ(Hambach)で、急進派による「自由と統

一」を唱える大規模な民衆祭典のハンバハ祭が催された。²⁰⁾ ここで、人民主権や共和制の樹立、ドイツの統一と諸民族の解放等の要求が高らかに叫ばれた。このハンバハ祭に大きな衝撃を受けたドイツ連邦議会は、即座に言論と集会に対する弾圧を議決するに至り、いわゆる「デマゴーグ狩り」に乗り出した。

文学界に対する締め付けとしては、1835年「若いドイツ」(Junges Deutschland)に属するハイネ(Heinrich Heine 1797~1856)、グッツコー(Karl Gutzkow 1811~78)、ラウベ(Heinrich Laube 1806~84)、ヴィーンバルク(Ludorf Wienbarg 1802~72)、ムント(Theodor Mundt 1808~61)の5人に対する出版禁止令が出された。国家安全機関は、社会の自由な動きを窒息させようと躍起になった。三月革命前のこの時期、ドイツ文学は一つの転換期を迎えようとしていた。若い文学者は、政治問題への関与や新しい散文の開拓などに積極的に取り組んだ。ハイネが「芸術時代の終り」を宣告したとき、彼らの合言葉は「反ゲーテ」だった。ゲーテの文学がつくった規範の重圧を撥ね退けないことには、自分たちの文学を世間に通用させることはできないと感じたのである。²¹⁾

このような微妙な時期に、ベッティーンは『ゲーテとある子供との往復書簡』を出版したのである。彼女はこの本の印刷中にすでに多くの方面から誹謗中傷を受けた。かなり多くを抜かしているとか、異なる方向へ目を向けようとしているといった非難である。しかし、彼女は自分にとって良い忠告だけを受け入れようと思ったと序文にきっぱりと書いている。そこで、序文は「この本は善人のためにあるのであって、悪人のためにはない」と極めてシンプルな言葉で書き始められている。この本が世に出たとき実際、センセーションが起り、彼女はたちまち有名人になっていた。「党派に混乱が起きた。賛成であるはずの人が反対し、反対であるはずの人が賛成した」と「若いドイツ」の雑誌は書いている。²²⁾ そして彼女をロマン派文学時代の巫女、ロマン主義的・神秘的予言者の不思議な妖精と命名した。彼女は時代の真只中へ突如として押し出されていった。このと

き閉塞した政治社会状況の中に、フツと風穴が開いたかのような感じだった。このような状況下で風穴を開けることのできる人物の条件というのは、官職についていない、派閥に属していない、しかし地位が高く、批判的思考力があり、教養があって、恐れを知らない人物、さらに参加し共に感じることができ、鋭く先を見通せる人物ということになるが、その役をベッティーナは引き受けたとクリスタ・ヴォルフは評している。²³⁾

彼女はしかも、女であることの社会的不利な条件を逆手に取った。女には何もできないだろうと軽んじる男社会の中で、少し風変わりな人物と見なされることによってむしろ容易に己を通すことができた。ベッティーナのサロンには、さまざまな人たちが集い、自由に議論しあった。彼女のサロンは警察によって絶えず監視されていたが、警察も法的には手出しをできない。彼女の好きなようにやらせておくしかなかった。それを知ってか知らずにか、彼女は大胆で向こう見ずだった。素朴なのか、そう振舞っているだけなのか、或いは抜け目がないのか、自己検閲する人間には彼女のやり方はさっぱりわからなかった。²⁴⁾

さて、政治的弾圧は、学生や急進派に向けられたばかりでなく、自由主義的な大学教授にまで及んだ。北ドイツの自由主義思想の中心ゲッティンゲン大学の所属するハノーファー王国では、1837年新国王となったエルンスト・アウグストが、1833年に制定された憲法を破棄して、官吏の憲法宣誓の無効を宣言した。これに抗議して、歴史学教授ダールマン (Fr. Chr. Dahlmann 1785~1860) は、直ちに言語学者グリム兄弟ら同僚の教授に呼びかけ立憲制擁護に立ち上がった。いわゆる「ゲッティンゲン七教授事件」である。²⁵⁾ その結果彼らは弾圧され免職され、一部の者は国外追放の処分を受けた。このとき、ベッティーナはグリム兄弟のために奔走した。

ベッティーナは、グリム兄弟とは彼らがマールブルク大学の学生だった頃からの友人だった。兄ヤーコプ (Jacob Grimm 1785~1863) は1802年春にマールブルク大学に入学し、弟ヴィルヘルム (Wilhelm Grimm 1786~1859) はその翌年の03年春に入学した。兄弟は当時マールブルクの

新進の助教授だったザヴィニイに師事した。ザヴィニイは、1803年に「所有権論」を著し、名声を高め、やがて歴史法学の創始者となるが、そのザヴィニイから彼らは大きな感化を受けると共に、彼の家庭にも出入していた。ザヴィニイは04年にベッティーナの姉グンダと結婚したので、ベッティーナもザヴィニイ家に頻繁に出入していたのである。兄弟はザヴィニイから歴史的考察の価値を教えられ、特に兄ヤーコブはザヴィニイの研究の手伝いもして、学問の研究方法を学んだ。ザヴィニイは、彼らの一生の方向を決定するような影響を与え、彼らに学問の道を志すきっかけを与えた人物、いわば彼らの恩師だった。²⁶⁾

しかし、ザヴィニイは1810年からベルリン大学教授であると同時に、プロイセン国の司法省参事、國務院議員などの要職を兼ねていたので、7教授の抗議に賛意を表しかねていた。特に夫人のグンダが夫の地位を考慮したことも、夫を消極的にしたといわれる。このことは、グリム兄弟を非常に落胆させた。²⁷⁾ このとき、ベッティーナは後にプロイセンの司法大臣になる人物であり、しかも彼女の子供たちの後見人でもあるザヴィニイに手紙を書き熱心に説得した。彼がグリム兄弟の青春時代に果たした役割を思い起こさせ、彼の学者としての連帯感に訴えたのである。²⁸⁾

プロイセン王国では、1840年6月7日フリードリヒ・ヴィルヘルム4世(Friedrich Wilhelm IV 1795~1861)が、前王の死とともに王位に付いた。彼はかねてからグリム兄弟に好意を寄せていたので、王位に付いた数日後には、ザヴィニイにグリム兄弟を呼ぶことを伝えた。こうして一年後にグリム兄弟はプロイセン・アカデミー会員としてベルリンへ招かれた。ベッティーナは、グリム兄弟の権利を守るために奔走した過程から王をはじめとして、政治家や高級官吏らの考え方や行動様式を深く学んだ。国家の倫理は日常の倫理とはかけ離れていて、正反対であると知った。この観察が、彼女の後の本に多いに役立つことになる。それは、『国王に捧げる書』においてである。ところで、彼女の末娘ギーゼラ(Gisela 1827~89)は、後にヴィルヘルム・グリムの息子ヘルマン・グリムと結婚する。彼女も文才

があり、童話を書いた。

ベッティーナは、グリム兄弟のために熱心に動いていた一方で、1840年2冊目の本『ギュンデローデ』を出版した。55歳のときだった。この本は「学生たちに捧げる」と学生たちへの献辞で始まっている。彼女は熱烈な調子で「踏み潰された野原に咲く黄金の花のようなあなたたちよ、さあもう一度花を咲かせなさい！」と呼びかけた。²⁹⁾ これに対して、返礼としてベルリンの学生たちは彼女に松明行列を献上した。彼らはベッティーナの言葉を政治的な意味に理解したのだ。

ベッティーナは、彼女の個人的な友の回想のこの著書に、何故このような唐突とも思えるような献辞を学生たちに送ったのだろうか。この疑問に対して、クリスタ・ヴォルフは以下の答えを出した。ベッティーナは、自分自身の青春の遺産を後代に伝えておきたいと思ったことは明白であるが、その上になお、そこには一人の学生への愛が彼女の書くことへの情熱を引き出したと考えた。ベッティーナは、彼女の最初の本『ゲーテとある子供との往復書簡』をピュックラー侯爵（Hermann Fürst Pückler-Muskau 1785~1871）に捧げた。彼は旅行作家で造園技師、彼女のサロンの常連の一人だった。このことにマグデブルクの学生、ユリウス・デーリング（Julius Döring）が抗議の手紙を彼女に送りつけた。ベッティーナの本の崇拜者だった彼は、彼女の次の出版物は学生に捧げるように要求したのだ。このことから、二人の間で文通が始まり、ベッティーナは彼から新鮮な刺激を受けた。そして1840年7月20日デーリング宛の手紙で、ベッティーナは『ギュンデローデ』を執筆中であると打ち明けている。³⁰⁾

「私は今まで仕事をして疲れています。しかし、不思議なことにこの仕事をしている間は、いつもほどには眠る必要がないのです。私は書いている最中にしばしば崩れるように倒れこみました。しかしそれと引き換えに、私には昔のことが目覚めていました。私は、あなたがそれだと信じてよいならば、私の指をあなたの傷口に当てさせてくださいとトマス³¹⁾が言ったようには、言うことができませんでした。— ギュンデローデが私の前

に立っています。晩に私の部屋の明かりが灯るとき、彼女はしばしば私を呼びます。緑の大きなもみの木がクリスマス以来まだ立っているあの隅へ来るようにと。もみの木はソファの前であって天井にまで達しています。その傍らで、私は空想の中で彼女に出会うことに逆らうことができないままに、コートに包まれてじっとしています。そのとき眠りが私を襲うのです。わかるでしょう、私があなたと話していたとき眠りがあなたを襲ったように。— 眠りに就くとすぐに精神に出会うということは、実に不思議です。眠りというものはより深い精神に向かって密かに近づいてくるもののようなのです。ギュンデローデが眠り、そして私も呼び覚まされた記憶を通して再び彼女に近づいたので、眠らざるを得なくなったときすぐに。— しかし、昼間にも私は過ぎ去ったすべてのものと非常に近くにいるのを感じているので、現実には体験したすべてのものの不変の現在を私ははっきりと確信します。」³²⁾

ベッティーネは、聖書からの比喩を用いながら、この平凡な若い学生をゲーテに叙任して、彼に心の秘密を打ち明けているのである。ギュンデローデから拒絶されたときのあの青春の激しい苦しみ、封印してきた過去を一挙に曝け出している。「この私の本を読み、そして私を愛さないものは心の中に青春を持ったことがないのです。私はこれを整理している間、毎日あなたのことを考えていました」³³⁾と続ける。ベッティーネがデーリングに対して抱いた感情は精神的であり、感性的な愛、ギュンデローデに対して抱いた愛と同じような感情である。ベッティーネは感情的に徐々に彼に入れ込んでゆく。

1839年6月の手紙では、デーリングから手紙が来ないことにいらいらして書いている。「数行でも書いてください。それで私はうれしいのです。私はあなたを離しません。あなたは私の手の間から消えないでしょうね。あなたは私の空想の一つの現象に過ぎないのかもしれませんが；でもあなたは生きていなければなりませんよ。—すべてが私から消えてしまいました。あなたが幻影だとしても、何と稀なことでしょう。あなたが消える前に、

私はもう一度あなたにキッスして、あなたを胸に抱きしめます。これは私の感覚の中にある現実なのです。そして、私の考えがあなたを産み出したように、わたしはこのことを記憶にとどめておくつもりです；あなたは愛すべき人でしたし、そして私にとってかけがえのない人だったということ。」³⁴⁾

クリスタ・ヴォルフは、これらの手紙から『ギュンデローデ』の作品に秘められたものへと近づき、次のように書いている。『『ギュンデローデ』の中にはこの非常に個人的な響きが入り込んでいることを私は確信している。魂の事象のように首尾一貫していないが、彼女の最初の愛の別離の再演で、彼女の最後の愛への断念が、そもそも愛それ自体への断念がベッティーネには容易になった。ベッティーネは1839年の彼女の状態と1805年の彼女の感覚と空想との間で区別することができないし、また区別しようとも思っていない。またそれが現れ出る正に生の関連性が、この本に微光と魅力と時間の奥行きを与えている。それは作品としては完璧な仕上がりとはいえないが、互いに重なり合い、互いの中へ溶け込んでいく層から合成されていて、その周辺部は整えられておらず、でこぼこしたままである；おおざっぱな通路と不整合性と裂け目がある。このことによってそれは正に、彼女の人生の解くことのできない矛盾と秘められた痛みをそっと告げているのである。』と。³⁵⁾

ベッティーネの胸には、長いこと忘れていたあの感情が呼び起こされ、青春の友から拒絶されたときの苦しみを思い出している。最後の愛が最初の愛と結びつく。そして、彼女は書くという作業によって、最初の愛が拒絶されたときの痛みを埋め合わせ、そして同時に最後の愛への諦めが生まれ、浄化されていった。

ベッティーネとギュンデローデ、二人の文学に対する考え方は違っていた。ギュンデローデは詩を書き、よき詩人たらしとして詩学も熱心に学んでいた。彼女は詩心（Poesie）の芽が内面から沸き起こったとき、それを言葉にしていくことに悪戦苦闘している。内面と形式の一致、それが巨匠

といわれる詩人の作品の特徴だが、そこに達することができないことで劣等感を味わっている。他方では、立派な作品を創造するために、厳格な規則に縛られている自分に疲れ果て、そして自己主張する。「私自身は、私の詩的な情諸をしっかりと捕らえる形象のみすばらしいことを認めねばならなかった。すぐ傍らには、確かにより豊かな形式やより美しい衣装が用意されており、そして私はより重要な素材をすぐにでも手元に持ち合わせているとも、考えることが時にはあった。ただし、それは魂の中で最初的情諸として生まれたものではなかった。だから、私はいつもそれを拒んだ。そして、私は私の中の実際の心の動きと少なくとも逸れていないものを守った。それ故に、私はあえてそれらを印刷させることにしたのである。それらは私にとってあの価値、つまり刻印された真実のあの聖なる価値があった。この意味ですべての小さな断章も私には詩なのである。」³⁶⁾ 彼女は真の詩人だった。

一方、ベッティーネはゲーテの詩を暗誦していたし、クレメンスから詩を書いてごらんと度々勧められていたが、書かなかった。彼女は、自分には揺るぎないもの、成熟したものは決して生み出せないだろうと思っていた。「私は晩に、或いは夜といってもよい時刻に窓辺で、私にはそう思えるのだが、実に素晴らしい考えを抱く。そのとき、私は私自身を楽しみ、私の感動がいわば私を感動させる。」³⁷⁾ ベッティーネにはポエジーはある。しかし、ポエジーは厳格な形式に入れ込もうとすると失われると彼女は詩作を拒否する。人間に対する場合も同じで、彼女の感覚はギュンデローデのみに向いているが、その感覚を詩という形で表現しようとは思わない。それよりもむしろ、彼女は直接的な人間関係を大切にしている故に、ギュンデローデへの手紙という手段に拘る。作品というものは、対象に対して一歩退いて見る冷静さと距離をおくことによって生み出されるものである。故に、直接的な人間関係を殺ぐ結果にもなる。それをベッティーネは望まなかった。また、自分が詩作することは冒瀆であるとも考えていた。女性の芸術家の天才はいないとはよく言われていることだが、それは女性

の生活状況とも関連していて、女性には対象との距離を置き難いという事情がある。しかし、そればかりでなくそもそも「天才」という概念そのものが男性によって作られたものであるので、女性がそれに合わせることの困難さとも関連しているのだ。³⁸⁾ このことをギュデローデは予感していたとクリスタ・ヴォルフは書いている。

ベッティーナはこれ以後、現実の社会と深く関わっていく。思想の革命を起こしたといわれるロマン派の作家たち、彼女の青春の仲間たちは散り散りになっていた。シュレーゲル兄弟の兄アウグスト・ヴィルヘルム (August Wilhelm von Schlegel 1767~1845) は1804年ドイツを離れ、弟フリードリヒ (Friedrich von Schlegel 1772~1829) は1808年カトリックに改宗し、ノヴァーリス (Novalis; 本名 Friedrich von Hardenberg 1772~1801) は早世し、クライスト (Heinrich von Kleist 1777~1811) は自殺した。そして、兄のクレメンスも1816年カトリックに改宗し、現実を逃避した。ロマン派の圏内でただ一人、三月前期の時代の現実と向き合ったのはベッティーナだけであった。彼女は、彼女のできる範囲内であったが、社会的に不利益をこうむっている人々や政治的に冷遇されている人々のために、情熱的に正義感を持って力を尽くした。ロマン派が反動的になった一方で、ベッティーナは60歳近くになっていたにもかかわらず、政治的自由を要求する著書を書くのである。

おわりに

クリスタ・ヴォルフは1970年代ロマン主義作家に関心を持った。ベッティーナとギュンデローデに関するエッセイを書いたほかに、小説では1979年 *Kein Ort. Nirgends* (『どこにも居場所はない』) でクライストとギュンデローデとの架空の邂逅を描いている。東ドイツの文学というと、ルカーチ (György Lukács 1885~1971) のマルクス主義文学理論に則って古典主義美学を正統とし、ロマン主義をデカダンスとみなし否定してきた。それ

なのに何故クリスタ・ヴォルフはロマン主義に近づいたのだろうか。それには文学と党との関係を決定的に断絶させた事件があった。1976年政治批判的なシャンソンを歌うシンガーソングライターのヴォルフ・ビーアマン (Wolf Biermann 1936~) に対する国籍剥奪事件が起きた。彼が西ドイツ公演中になされた処置であった。この処置にクリスタ・ヴォルフら12名の文学者は考え直すよう政府に請願書を出したが、結局彼らも党を除名されるという厳しい制裁を受けた。³⁹⁾ その後12名のほとんどは西ドイツへ移住したが、ヴォルフは残った。しかしこれ以後、文学と政治との蜜月関係は崩れていった。文学は東ドイツの社会にとってもはや無用との烙印を押されたということである。ヴォルフは、文学(者)が社会から疎外されていったこの経験から、一世紀半ほど前に社会から挫折していったロマン主義作家たちに目を向けたのである。そして、1970年代後半の東ドイツと1800年代前半のドイツとの社会状況の類似性に気づく。クリスタ・ヴォルフがロマン主義に接近して言った理由は、このように彼女自身が東ドイツの社会の中で、自分の居場所を求めていたからであった。彼女自身の問題とロマン主義の問題とを重ね合わせて、複眼的視点で見えていくと一層興味深い。ロマン主義が抱えていた諸問題は、これからも恐らく時代の節目毎に、再認識されるのではなかろうか。

なお、次には『国王に捧げる書』を中心に論じたいと思う。

注

- 1) a) Christa Wolf (hrsg.), Vorwort zu: *Karoline von Günderrode Der Schatten eines Traumes*, 1979, Berlin.
b) Reprint: 1997, Deutscher Taschenbuch Verlag, München.
c) 翻訳: クリスタ・ヴォルフ (保坂一夫訳)、「夢の影」、クリスタ・ヴォルフ選集6『どこにも居場所はない』、1997、恒文社、pp.145-235.
- 2) Christa Wolf (hrsg.), Nachwort zu: Bettina von Arnim, *Die Günderode*, 1981, Insel Verlag, Leipzig.
- 3) Christa Wolf, *Die Dimension des Autors* II, 1986, Aufbau-Verlag, Berlin und Weimar.
- 4) Walter Schmitz und Sibylle von Steindorff (hrsg.), *Bettine von Arnim Werke und Briefe, Bd. 1*, 1986, Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, p. 796.

- 5) Ibid., pp. 796, 797.
- 6) Katja Behrens (hrsg.), *Frauenbriefe der Romantik*, 1982, Insel Verlag, Frankfurt am Main, p. 68.
- 7) Schmitz und von Steindorff, Bd. 1, p. 854.
- 8) Behrens, p. 20.
- 9) Ibid., p. 21.
- 10) Ibid., p. 15.
- 11) Ibid., p. 69.
- 12) Ibid., p. 72.
- 13) Ibid., p. 68.
- 14) Schmitz und von Steindorff, Bd. 1, p. 868.
- 15) Walter Schmitz und Sibylle von Steindorff, *Bettine von Arnim Werke und Briefe, Bd. 2*, 1992, p. 824.
- 16) Ibid., p. 833.
- 17) Ibid., pp. 834, 835.
- 18) L. Achim v. Arnim und Clemens Brentano, *Des Knaben Wunderhorn Band I*, 1806, Mohr u. Zimmer, Heidelberg.
- 19) A. von Arnim und C. Brentano, *Des Knaben Wunderhorn Band II, III*, 1808, Mohr u. Zimmer, Heidelberg.
- 20) 木村靖二編、『ドイツ史』、2001、山川出版社、pp. 189-190.
- 21) 藤本淳雄、岩村行雄、神品芳夫、高辻知義、石井不二夫、吉島茂、『ドイツ文学史 第2版』、1995、東京大学出版会、pp. 158, 159.
- 22) Wolf, 3) p. 126.
- 23) Ibid., p. 127.
- 24) Ibid., p. 129.
- 25) 木村、前掲書、p. 190.
- 26) 高橋健二、『グリム兄弟』、1987（13刷）、新潮社、p. 56.
- 27) 同上、p. 193.
- 28) Wolf, 3) pp. 141, 142.
- 29) Schmitz und von Steindorff, *Bd. 1*, p. 297.
- 30) Wolf, 3) p. 135.
- 31) キリストの十二使徒の一人。イエスの復活を信じようとしなかったが、その傷口に手を入れて初めて信じ、イエスを神と告白したとされる（ヨハネ福音書 20・24, 25）。[ブリタニカ国際大百科事典より]
- 32) Walter Schmitz und Sibylle von Steindorff, *Bettine von Arnim Werke und Briefe, Band 4*, 2004, Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, p. 410.
- 33) Ibid., p. 411.
- 34) Ibid., pp. 362, 363.
- 35) Wolf, 3) pp. 137, 138.

クリスタ・ヴォルフのエッセイ『ベッティーネ論』について

- 36) Wolf, 1b) pp. 230, 231.
- 37) Wolf, 1b) p. 238.
- 38) Wolf, 3) p. 152.
- 39) 恒川隆男、平子義雄、小松英樹、根本萌騰子、尾川浩、大中智男、若槻敬佐、
『文学にあらわれた現代ドイツ』、1997、三修社、p. 178.